

法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、京都国立博物館の旧本館建物の基礎の状況の確認に伴う法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

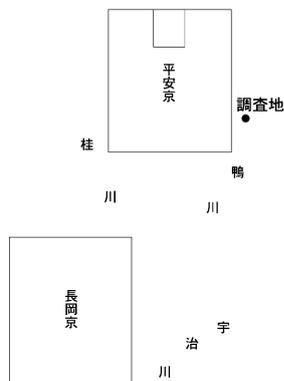
平成 22 年 12 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市東山区茶屋町 527 京都国立博物館構内 |
| 3 委 託 者 | 独立行政法人国立文化財機構 京都国立博物館 分任契約担当役
太田和良幸 |
| 4 調査期間 | 2010年8月16日～2010年9月10日 |
| 5 調査面積 | 約 50 m ² |
| 6 調査担当者 | 高橋 潔 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1 : 2,500）「五条大橋」を参考にし、
作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 本書作成 | 高橋 潔 |
| 12 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査
業務職員があたった。 |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	6
4. 遺 物	13
5. ま と め	14
(1) 旧本館整地層と以前の遺構・整地層との関係	14
(2) 旧本館基礎の構築状況	14

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区全景（西から）
		2	1区北端断割後全景（西から）
図版2	遺構	1	1区旧本館基礎検出状況（西から）
		2	2区全景（北西から）
図版3	遺構	1	2区北拡張区全景（北から）
		2	3-2区全景（西から）
図版4	遺構	1	3-1区全景（西から）
		2	4区全景（南西から）
図版5	遺構	1	5区全景（北から）
		2	6区全景（北西から）
図版6	遺構	1	7区全景（西から）
		2	7区旧本館基礎検出状況（北西から）

挿 図 目 次

図1	調査地および周辺の遺跡（1：10,000）	1
図2	2区コンクリートカッター作業状況（北東から）	2
図3	6区重機掘削（西から）	2
図4	1区人力掘削作業（南西から）	2
図5	4区埋め戻し状況（西から）	2
図6	京都国立博物館構内調査位置図（1：2,500）	4
図7	調査区配置図（1：1,000）	6
図8	1区実測図（1：50）	7
図9	2区実測図（1：50）	8
図10	3-2区実測図（1：50）	9
図11	3-1区・4区実測図（1：50）	10
図12	5区・6区・7区実測図（1：50）	11
図13	3-2区出土遺物	13

表 目 次

表1	調査一覧表	4
表2	遺構概要表	7
表3	遺物概要表	13

法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

1. 調査経過

今回の調査は、重要文化財に指定されている京都国立博物館旧本館建物基礎の状況を確認する調査である。現在、京都国立博物館では旧本館建物に対する耐震・免震の必要性和、その工事や施工法などに関する検討が行われている。この検討が行われる過程において、旧本館建物の基礎が実際にどのようなになっているのか、その現状と建設時の造成・整地、余掘りなどの作業の状況、またそれ以前の遺構や遺構面・地山の深度や残存状況など情報の収集が必要とされた。

このため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導により、京都国立博物館から委託を受けて、(財)京都市埋蔵文化財研究所が調査を担当することとなった。調査区は三者協議の下、旧本館建物の周辺に1区から7区の小規模な調査区を設定して行い、必要に応じて部分的な拡張を行った。

旧本館は建物外縁に幅2m前後のコンクリートによる犬走りが設けられており、1区、2区、3・

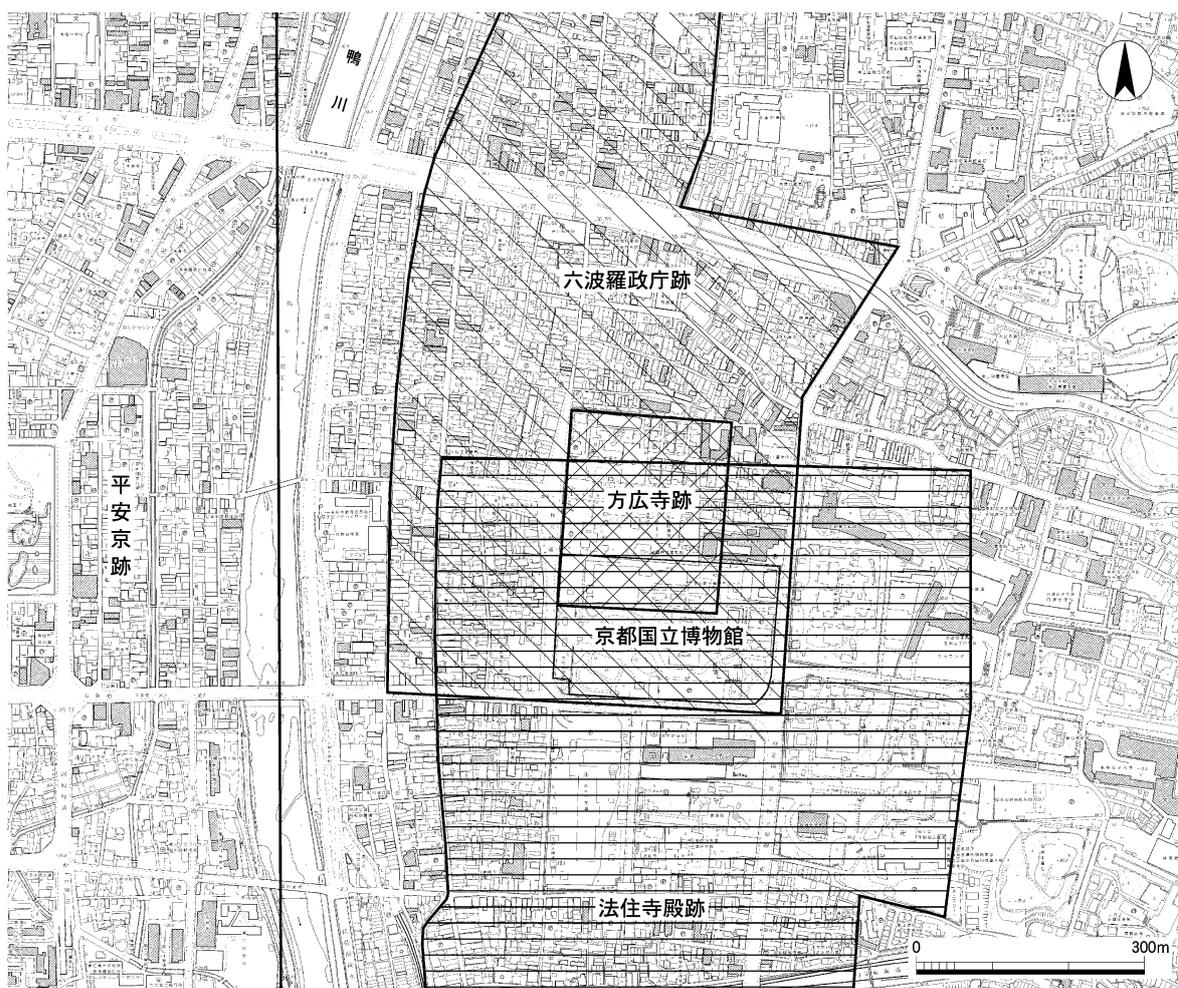


図1 調査地および周辺の遺跡 (1 : 10,000)



図2 2区コンクリートカッター作業状況(北東から)



図3 6区重機掘削(西から)



図4 1区人力掘削作業(南西から)



図5 4区埋め戻し状況(西から)

4区、6区では調査に先立って、コンクリート・カッターにより縁切りを行い、破碎機によって粉碎した。コンクリートガラについては、調査終了時に搬出・処分を行った。調査は第1週に1区と2区、第2週に5区と6区、第3週に3・4区と3-2区の重機掘削を行い、それぞれ調査を進めた。第4週には7区の調査にかかった。7区は旧本館南側の中庭に設けたため、人力による掘削で調査を進めた。

1区、2区、3-1区、4区、6区、7区で旧本館基礎を検出し、基礎の現状、それに伴う掘削や整地の状況、地山の深度との関係などを確認した。また、3-2区では旧本館建設に関わる整地層、地山を、5区で地山を確認した。いずれも、写真と実測図による記録を作成した。

調査中の排土は構内に仮置き、その土で埋め戻しを行った。

2. 位置と環境

本調査地は、京都盆地の東を限る東山の西麓に位置し、平安京の東を流れる鴨川にいたる西向きの緩やかな傾斜地に立地している。

本調査地の周辺では平安時代後期の法住寺殿および六波羅政庁、桃山時代の方広寺跡などの遺跡が知られている（図1）。博物館構内ではこれまでに11次にわたって発掘・立会調査を実施している（表1）。このうちの1次調査から9次調査については、『京都国立博物館構内発掘調査報告書』（文献9）としてまとめられている。また10・11次調査についても報告済みである。既往調査の詳細はそれらに譲り、歴史的環境を概観する。

法住寺殿は永暦2年（1161）に後白河法皇の御所として、長元5年（1032）に焼亡した藤原為光の法住寺（永延2年（988）建立）を基に造営された。寿永2年（1181）源義仲の襲撃により炎上、のち建久2年（1191）源頼朝により再建される。同じ頃、博物館敷地を含む北側の六波羅蜜寺の周辺に平氏の拠点として営まれた六波羅邸は、源氏の六波羅邸として新造され、承久3年（1221）承久の乱の後、京都周辺の治安維持のため鎌倉幕府の六波羅政庁（六波羅探題）がおかれた。六波羅政庁は元弘3年（1333）足利尊氏に攻められ焼亡する。博物館敷地は広大な法住寺殿の御所の北殿、および六波羅政庁の南端に推定されているが、これまでの調査ではこれらに関連する遺構は検出されていない。

天正14年（1586）、関白となり、豊臣の姓を賜った豊臣秀吉は大仏殿の建立を計画、方広寺の造営に着手した。ようやく大仏の開眼供養を迎えようとする文禄5年（1596）に起こった慶長大地震により大仏が損壊、秀吉は完成を見ることなく慶長3年（1598）没してしまう。慶長4年（1599）、意志を継いだ秀頼により大仏の再興がなされるが、慶長7年（1602）鋳造中の大仏より出火し大仏殿とともに焼失してしまう。秀頼は、再び大仏・大仏殿の造営・建立に着手、慶長17年（1612）に竣工し、慶長19年（1614）にようやく大仏開眼供養の運びとなるが、江戸幕府・徳川家の横槍により延期、果たせぬまま大坂冬の陣・夏の陣により豊臣家は滅亡する。博物館敷地は方広寺境内の南部にあたり、敷地北側および敷地外の調査によって、境内南辺および西辺の石塁、南回廊と南門の礎石据付痕、大仏殿の基壇・礎石据付痕、大仏台座などの遺構を良好に検出している。

豊臣家滅亡後、関連する諸施設が破棄されるなか大仏殿は残されたが、寛文2年（1662）の地震で大仏が破損し、寛政10年（1798）落雷によって大仏殿が全焼する。明治3年（1870）に入ってから方広寺境内の大部分が収公され、南部は御所の御黒戸に安置されていた仏像や歴代天皇の位牌を管理する施設である恭明宮が設けられるが、明治9年（1876）には廃止された。

その後、明治22年（1889）に、京都・奈良に帝国博物館を設置することが決定され、帝国京都博物館は恭明宮の跡地に建設されることになった。

陳列館（旧本館）は、片山東熊の設計による煉瓦造りの平屋建てで、明治25年（1892）に着工して明治28年（1895）竣工、帝国京都博物館として明治30年（1897）開館した。昭和44年（1969）

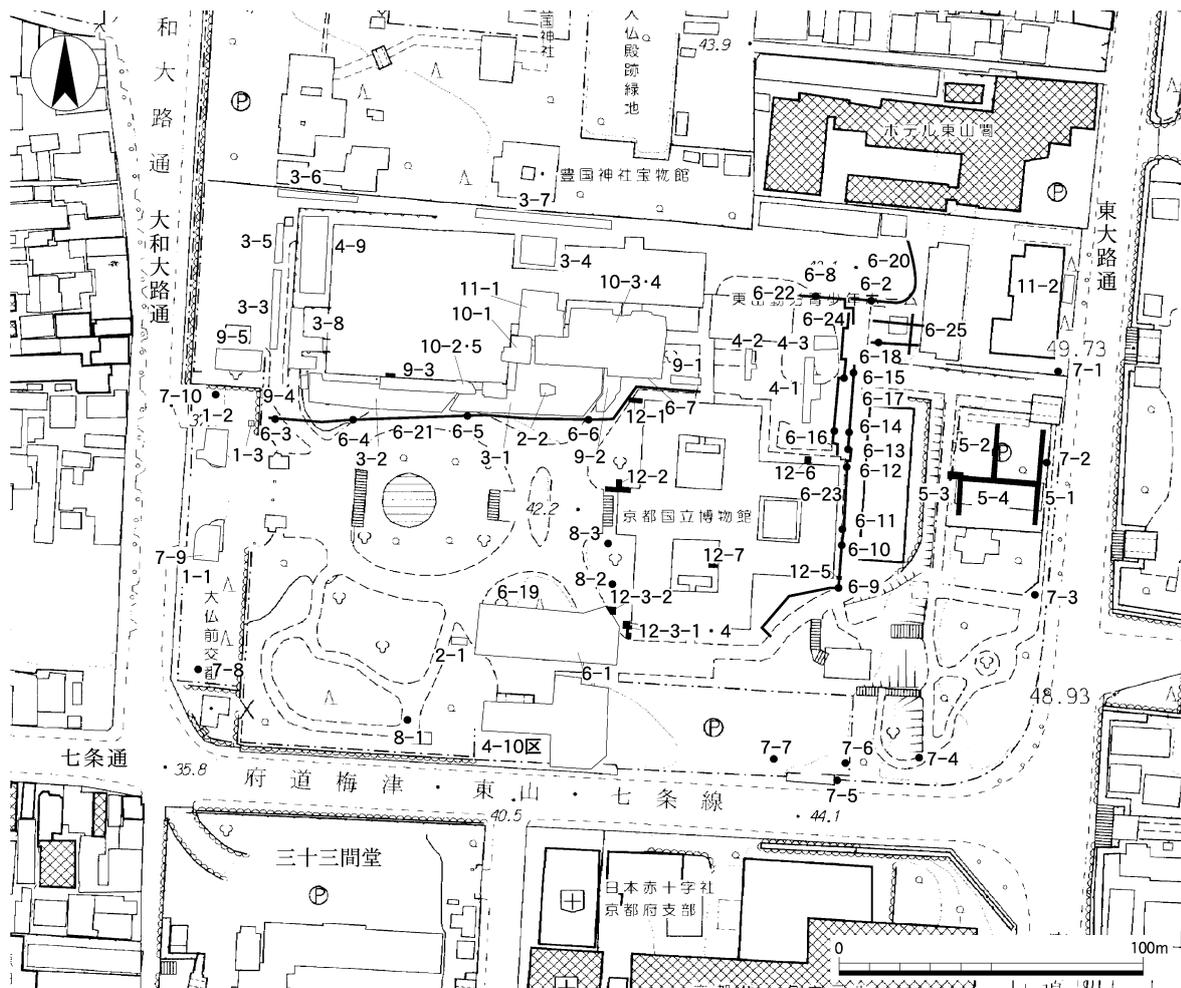


図6 京都国立博物館構内調査位置図 (1 : 2,500)

表1 調査一覧表

調査回数	調査期間	調査原因	調査	調査区	文献
1	1994年2～4月	西門施設建設工事	発掘	1～3区	1
2	1997年3月	遺跡確認調査	試掘	1・2区	2
3	1998年6月～1999年3月	新館建替え工事	発掘	1～7区	3
4	1999年7月～2000年3月	新館建替え工事、南門施設建設工事	試掘・発掘	1～10区	4
5	2000年9～10月	遺跡確認調査	発掘	1～5区	5
6	2001年12月～2002年3月	埋設管設置工事	立会	1～25区	6
7	2003年9月	監視装置増設工事	立会	1～10区	7
8	2003年11～12月	施設整備工事	立会	1～3区	8
9	2008年2～3月	新館建替え工事	発掘	1～5区	9
10	2008年12月～2009年3月	新館建替え工事	発掘	1～5区	10
11	2009年9～11月	新館建替え工事、遺跡確認調査	発掘	1・2区	10
12	2010年8～9月	旧本館基礎確認調査	発掘	1～7区	本報告

には旧帝国京都博物館陳列館として国の重要文化財に指定され、現在も特別展の展示館として使用されている。

【調査関連文献】(表1 既往調査一覧表の文献番号に対応する)

- 1 鈴木廣司・山本雅和「六波羅政庁跡」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1996年
- 2 小森俊寛「六波羅政庁跡」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1998年
- 3 田中利津子・近藤知子・大立目 一「六波羅政庁跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1998年
- 4 田中利津子・近藤知子・大立目 一「六波羅政庁跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2002年
- 5 田中利津子「六波羅政庁跡」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2003年
- 6 田中利津子「六波羅政庁跡」『平成13年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2004年
- 7 田中利津子・西村洋子「六波羅政庁跡1」『平成15年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』2005年
- 8 田中利津子・西村洋子・清藤玲子「六波羅政庁跡2」『平成15年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』2005年
- 9 山本雅和・網 伸也・田中利津子『京都国立博物館構内発掘調査報告書 ―法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡―』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊 2009年
- 10 網 伸也・加納敬二・田中利津子ほか『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-8 2010年

3. 遺 構

調査区は、旧本館の周囲と中庭部分に小規模な1区から7区の7箇所（図7）を設けた。旧本館の基礎は、1区、2区、3-1区・4区、6区、7区で検出した。基礎はいずれの地点でもいわゆる地山まで掘込みを行い、その上にコンクリート基礎を打ち、レンガを積み上げるものである。

最下層のコンクリート基礎は、型枠を設置して径5cm前後の小石を骨材としてコンクリートを流し込み、天場は標高41m前後の水平面を確保している。地点によって基礎の厚さや施工状況が異なる。レンガ基礎部分はいずれもコンクリート基礎の上面に、下から2段+2段+2段を控え積みし、5段+2段を垂直に積む。目地にはセメントモルタルが用いられる。基本的にレンガは短辺10.5cm、長辺22.8cm、厚さ6.3cmのものを使用しており、1段ごとに長辺を主体にする段と短辺を主体にする段を交互に配する「オランダ積み」が採用されている。今回の調査ではコンクリート基礎下面まで掘り下げることはできず、以下の構造については確認はできなかった。

以下に、各調査区ごとに調査の状況をまとめる。いずれの地点でも旧本館建設に伴う整地層を現代盛土層の下面で検出している。旧本館整地層の直下がいわゆる地山となる5区・6区以外の調査区では、江戸時代末期から明治時代初頭と考えられる恭明宮に関連する整地層が確認でき、その下面はいわゆる地山となる。

1区（図8、図版1・2） 旧本館北西角部分の西面に直交する、幅1.5m、長さ4.5mの東西

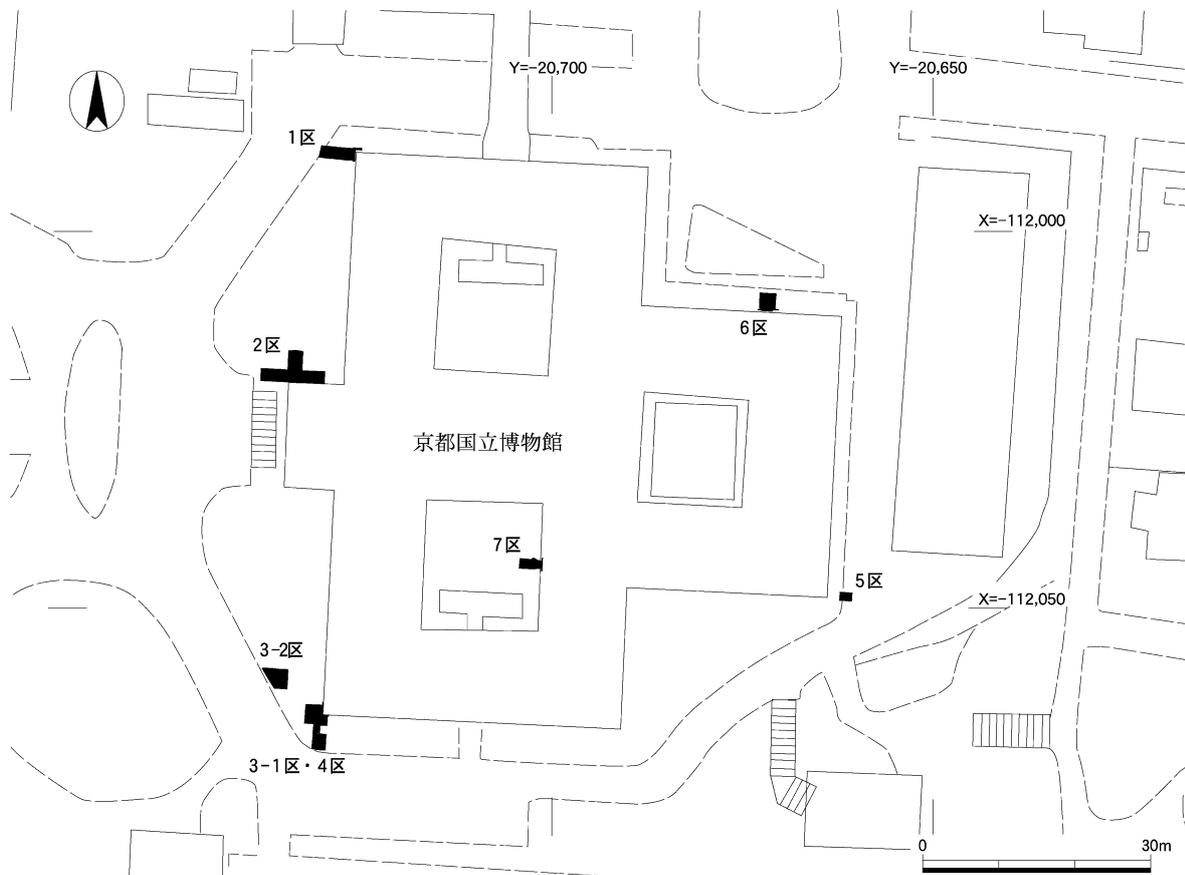


図7 調査区配置図（1：1,000）

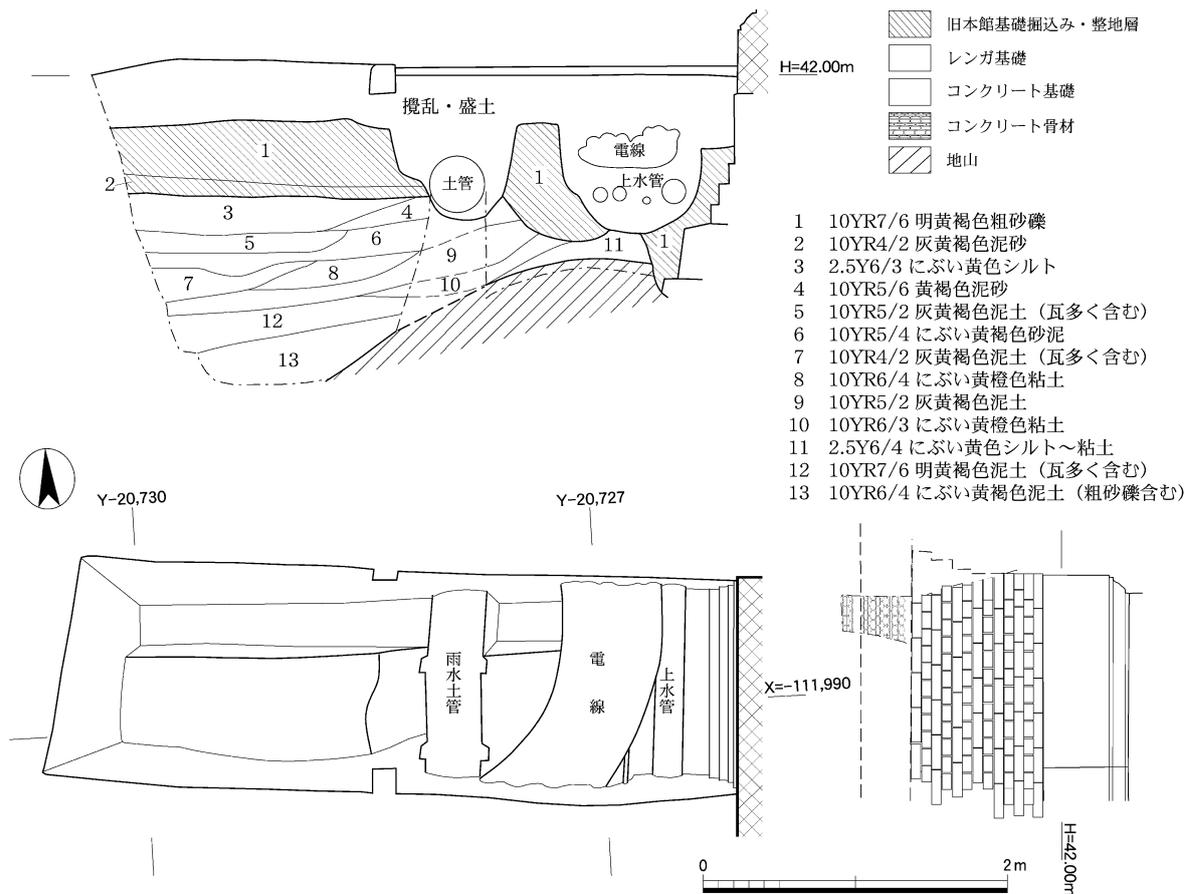


図8 1区実測図（1：50）

方向に細長い調査区である。本館より西へ約 2.2 m までは雨水排水のための土管や高压電線、上水管などの埋設による掘削によって、深さ 1 m 辺りまで攪乱されている。旧本館整地層上面は 41.70 m 前後で、整地層の厚さは約 0.5 m である。地山は東で高く（標高 40.80 m）、西へ大きく落ち込む状態（標高 40.00 m 以下）で検出した。旧本館整地層と地山の間は、方広寺期の瓦を含む整地層（図 8 の 3～13 層）であるが、明確な時期を決めることはできなかった。少なくとも方広寺以降、旧本館建設以前の整地層であり、大きく西へ下がる谷状の地形を埋め立てたものと考えられるが、井戸のような掘込みの埋土である可能性もある。

旧本館基礎構築のための掘削は地山を掘り込んでおり、コンクリート基礎部分は地山直上に上・下 2 段構築され、その上に煉瓦基礎がのる。コンクリート基礎の下段は厚さ 0.1 m 以上で上面の

表 2 遺構概要表

時代	遺構	備考
時期不明	整地層（1区）	
江戸時代末期～明治時代初期	整地層（2区、3-2区、4区、7区）	
近代（博物館建設時）	旧本館基礎および掘込み、整地層	

-  旧本館基礎掘込み・整地層
-  レンガ基礎
-  コンクリート基礎
-  幕末～明治初頭整地層
-  コンクリート骨材
-  地山

- 1 径10～20cmグリ石
- 2 2.5Y7/6 明黄褐色砂泥
+7.5YR6/6 橙色砂泥
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
+10YR5/2 灰黄褐色泥砂
- 4 10YR3/1～6/4 黒褐色～
にぶい黄橙色泥砂
- 5 2.5Y7/4 浅黄色細砂～シルト
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 (粘質)
- 8 10YR4/1 褐灰色砂泥 (粘質)
- 9 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂
- 10 10YR6/4 にぶい黄橙色砂泥
- 11 2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂
- 12 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂
- 13 10YR5/2 灰黄褐色砂泥
- 14 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 15 2.5Y5/4 黄褐色粗砂礫
- 16 上部：10YR3/3 暗褐色泥土
下部：10YR6/4 にぶい黄橙色泥土

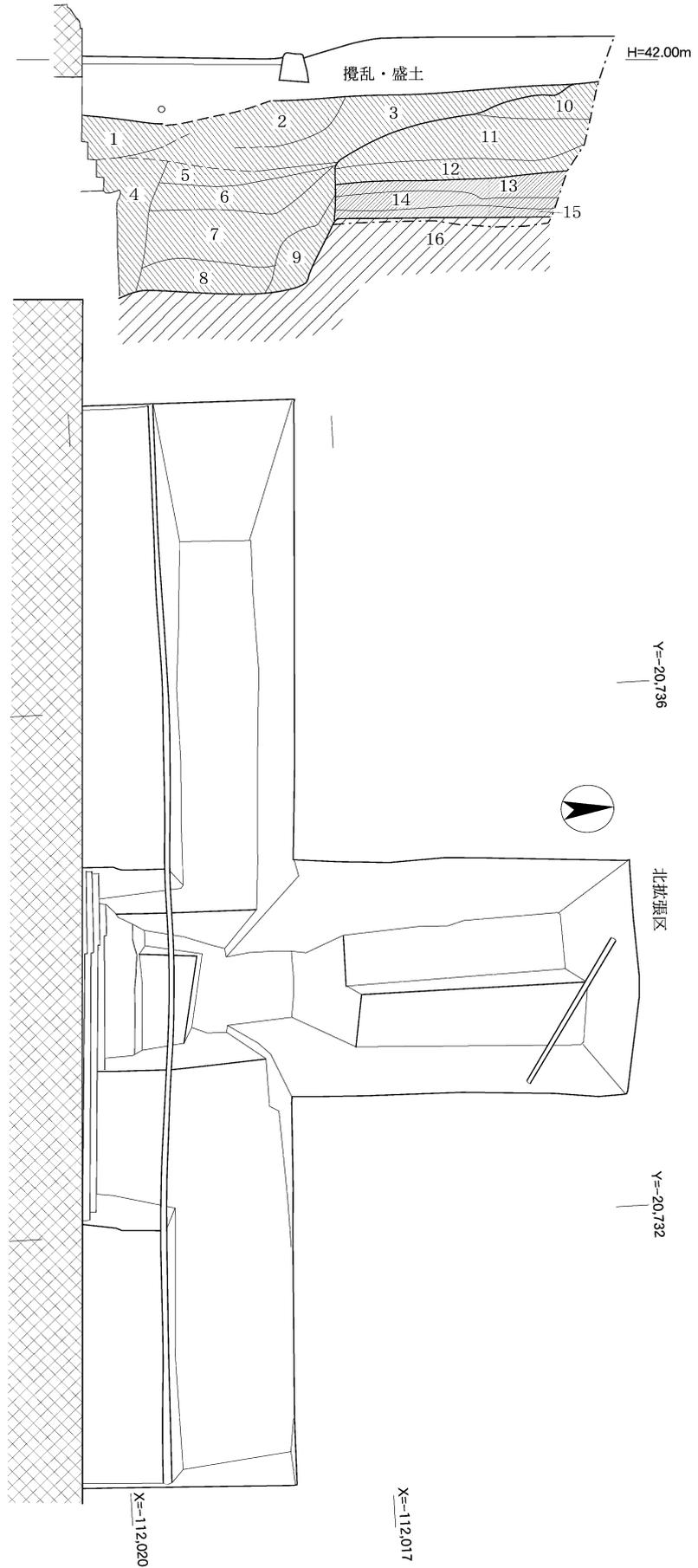
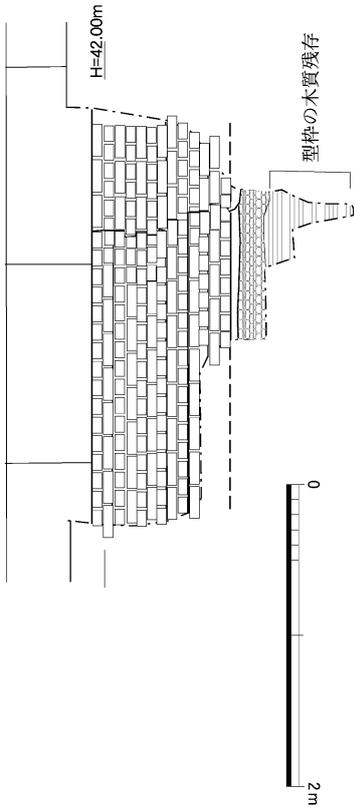


図9 2区実測図 (1:50)

標高は 40.65 m、上段は厚さ 0.35 m で上面の標高は 41.00 m である。

2 区 (図 9、図版 2・3) 旧本館入口と前面 (西面) に設けられた階段部分の北側、外縁の犬走り部に設定した、幅 1.6 m、長さ 8.3 m の東西方向の調査区である。後に中央部を東西 1.8 m、南北 2.5 m 分北へ拡張した (北拡張区)。旧本館整地層上面は 41.80 m 前後で、整地層の厚さは約 0.5 m ある。基礎構築のための余掘りとして、建物より北 3.65 m から緩やかに掘り込み、1.9 m の地点より深く掘り込み、地山を大きく掘削する。掘削の下面は標高 40.25 m である。この旧本館全面階段北側の地点では、建物北壁より 1.9 m 前後の幅で地山まで深く余掘りがなされている。余掘りの北側では、旧本館整地層の下層に、江戸時代末期から明治時代初頭と思われる整地層 (上面標高 41.25 m) が厚さ 0.4 m 前後あり、その下面は地山 (上面標高 40.80 m) である。

旧本館基礎構築のための掘削は、余掘りを一旦埋め立てた後、改めて構築に必要な幅 (本館壁面より 0.6 m) を掘り直している。コンクリート基礎は、余掘りの下面から厚さ 0.8 m (上面標高 41.00 m) あり、北面には型枠として用いた板材が残存していた。レンガ基礎部分の構築は基本通りである。なお、西面する階段部分のコンクリート・レンガ基礎は、旧本館本体コンクリート・レンガ基礎と一連の作業ではなく、何らかの理由で後から付け足された痕跡が明瞭である。

3-2 区 (図 10、図版 3) 旧本館南西部前面 (西面) の状況を確認するため、3-1 区の西側に本館より西へ 5 m 離れた地点に設けた南北 2.5 m、東西 3.3 ~ 1.6 m の台形の調査区である。南半には地表下 0.1 m でコンクリートの打たれた面が検出されたので、北部のみを東西方向に断ち割るような形で調査を進めた。厚さ 0.4 m の現代盛土の直下、標高 41.70 m で本館整地層上面となる。旧本館整地層は厚さ 0.8 m あり、その下層は江戸時代末期から明治時代初頭の整地層 (上面標高 40.90 m、厚さ 0.35 m) となり、さらに下層は地山 (上面標高 40.55 m) となる。

3-1 区・4 区 (図 11、図版 4) 旧本館南西角部分の基礎の西面・南面に南北 2.5 m、東西 2.9 m の方形の調査区と、その南側にマンホールや雨水排水柵などをさけて南北 3.3 m、東西 1.65 m の調査区を設けたが、雨水管や上水管・電気線などが埋設され、掘削範囲が限定され

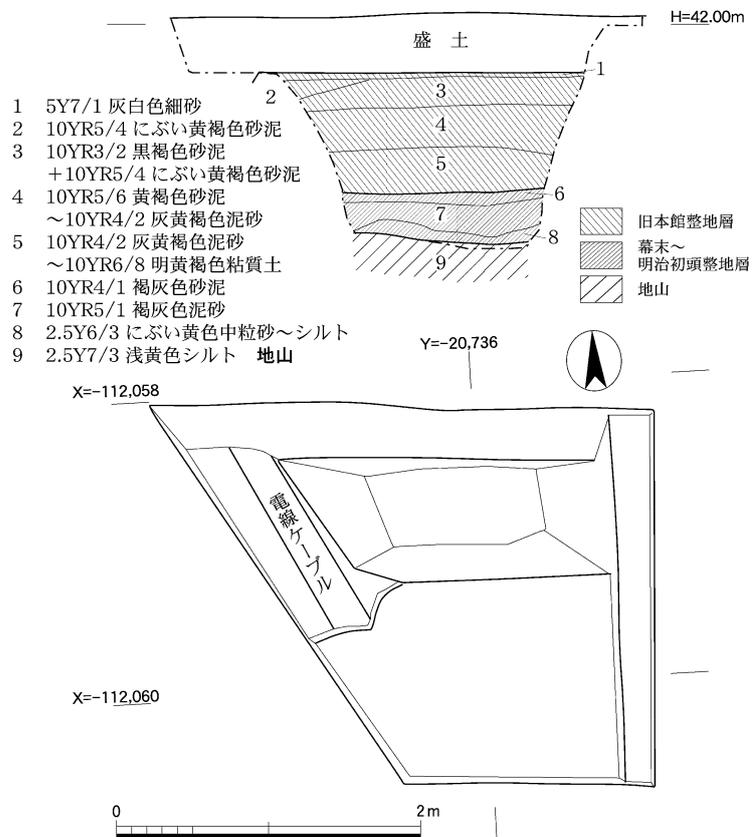


図 10 3-2 区実測図 (1:50)

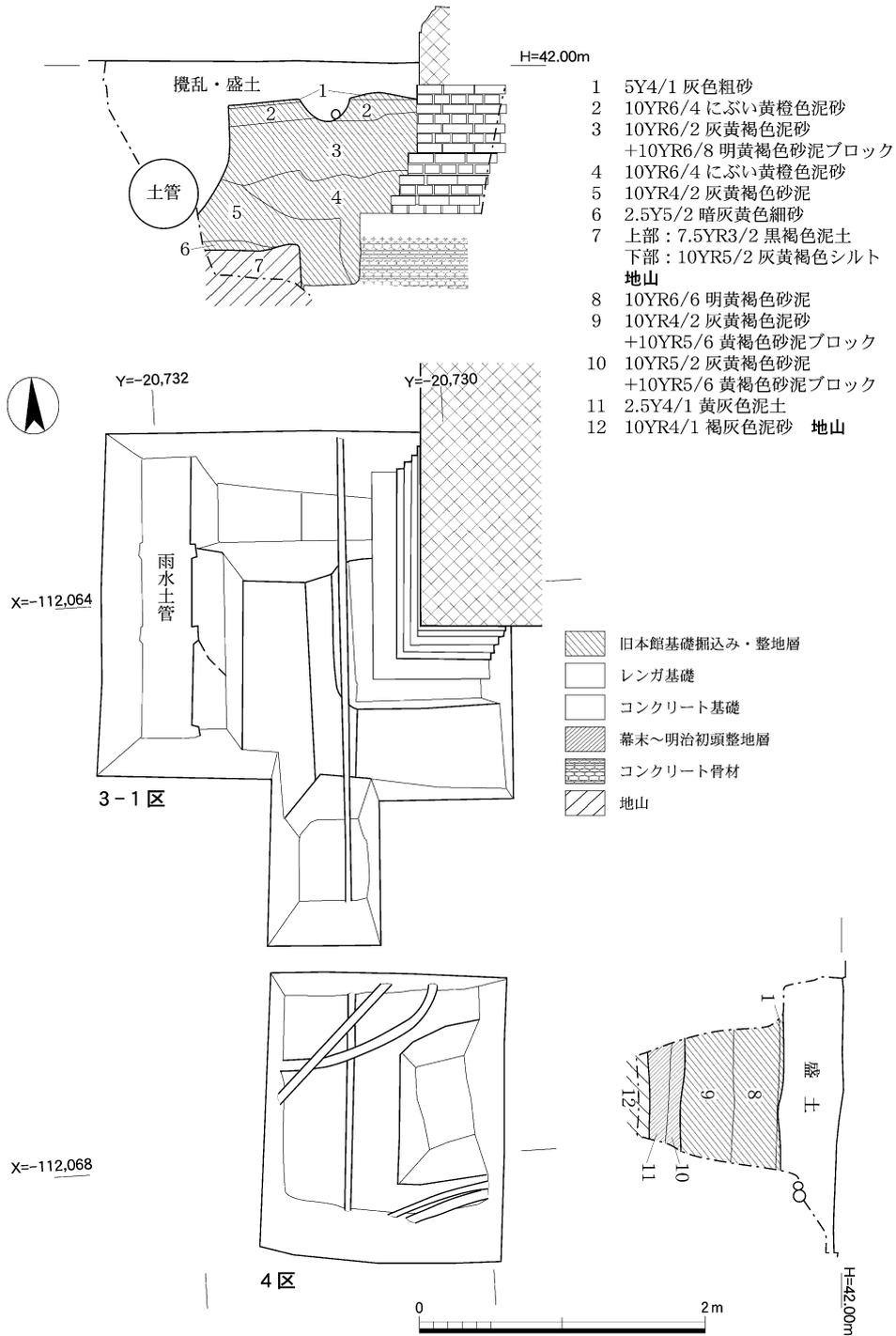


図11 3-1区・4区実測図(1:50)

た。そのため土層は本館基礎西面の北壁と基礎南面より2.5m南へ離れた東壁で観察した。北壁では現代盛土が厚さ0.3mあり、その下面が旧本館整地層(上面標高41.7m)となる。旧本館整地層は厚さ1.0mあり、その直下が地山(標高40.70m)である。本館基礎構築のための掘削は地山を0.3m(標高40.40m)以上掘り下げている。東壁では、上層より現代盛土(厚さ0.4m)、旧本館整地層(上面標高41.60m、厚さ0.7m)、江戸時代末期から明治時代初頭の整地層(上面標高40.90m、厚さ0.25m)、地山となり、地山上面の標高は40.65mである。

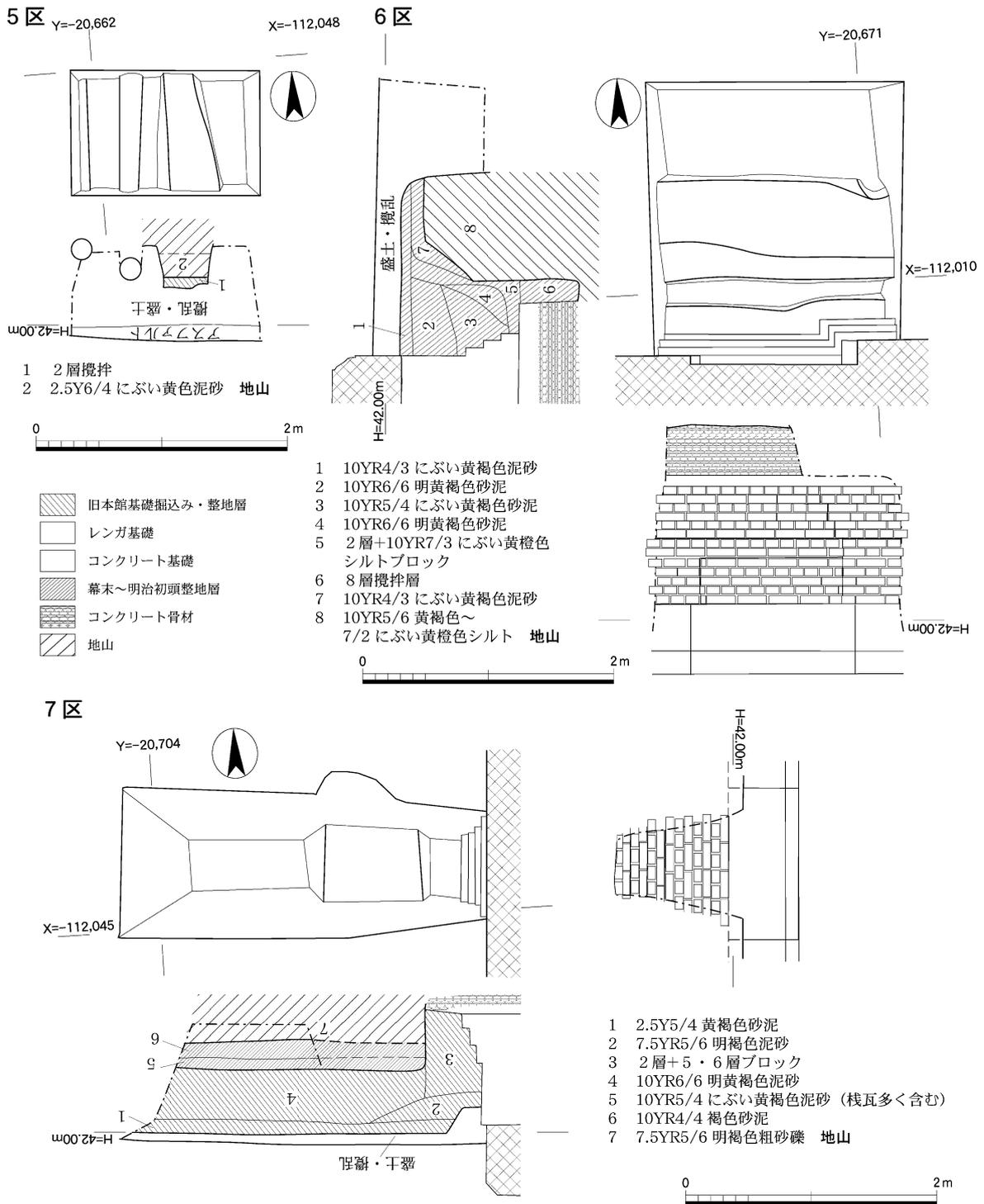


図12 5区・6区・7区実測図 (1:50)

北壁で確認した旧本館基礎は、地山を掘り下げた段階で1段目のコンクリート基礎（上面標高40.45 m）、さらにその上に2段目のコンクリート基礎（厚さ0.5 m、上面標高40.95 m）が打設されており、その上に煉瓦基礎が構築される。

5区（図12、図版5）旧本館南東角の東面、本館より東へ1.5 m離れた道路面に設けた南北1.0 m、東西1.5 mの調査区である。調査区の西側と東側には南北方向の既設の埋設管があり、中央部に0.2～0.4 mの幅で未攪乱の部分が辛うじて残存していたものの、旧本館建設時の大規模な

造成に伴って、以前の遺構面や地表面は地山とともに大きく削られている。層序は道路面のアスファルト・現代盛土が厚さ 0.3 m 前後あり、旧本館整地層（上面標高 41.70 m、厚さ 0.1 m）、以下地山（上面標高 41.60 m）である。旧本館基礎は、実際には確認していないが、地山を掘り込んで構築されていると推定される。

6 区（図 12、図版 5） 旧本館北東部、北面に設けた南北 2.2 m、東西 2.0 m の調査区である。調査区の北約 1 / 3 は東西方向の雨水管の掘形、また南約 1 / 3 は旧本館基礎構築のための掘削によって深く掘り込まれている。そのほか調査区中央部分の幅 0.5 m 分に未攪乱の部分が残存していたものの、5 区と同様に旧本館建設時の大規模な造成に伴って、以前の遺構面や地表面は地山とともに大きく削られている。現代盛土は厚さ 0.2 m、その下面が旧本館整地層（上面標高 41.90 m、厚さ 0.2 m）で、以下地山（上面標高 41.70 m）となる。

旧本館基礎は、本館建設時の大規模な造成によって平坦に削られた地山を、旧本館壁面より北へ 0.6 m の範囲をほぼ垂直に掘削して構築されている。確認した掘削の下面は標高 40.50 m である。コンクリート基礎は 0.45 m の厚さで打設されている（上面標高 40.95 m）。

7 区（図 12、図版 6） 旧本館南側の中庭に西面する壁面に直交して設けた南北 1 m、東西 3 m の調査区である。層序は現代盛土が厚さ 0.1 m、旧本館整地層が厚さ 0.5 m（上面標高 42.00 m）、江戸時代末期から明治時代初頭の整地層が厚さ 0.2 m（上面標高 41.50 m）、以下は地山（上面標高 41.30 m）となる。明確な遺構は検出できなかったが、江戸時代末期から明治時代初頭の整地層の上層では、棧瓦が平坦に敷かれたような状態で検出された。これは整地の際に敷き延べられたものと思われる。

旧本館基礎構築のための掘削は、本館壁面より西へ 0.5 m の範囲をほぼ垂直に掘り込んでおり、コンクリート基礎が掘形全面に及んでいたため、この部分の掘形の深さ・コンクリート基礎の厚さを確認することはできなかった。コンクリート基礎の上面標高は 41.05 m である。

4. 遺物

遺物は整理用コンテナに5箱出土した、表3に示したように鎌倉時代から室町時代、桃山時代から江戸時代前期、江戸時代末期から明治時代初期、明治時代中頃の遺物がある。

鎌倉時代から室町時代の遺物はごく少量、土師器や青磁の小片がある。いずれも後世の層に混入して出土した。

桃山時代から江戸時代前期の遺物には土師器、焼締陶器、施釉陶器、瓦類などのほか、壁土と考えられる焼けて硬化した粘土塊のようなものがある。方広寺に関連する時期の遺物であり、今回の出土遺物のなかで最も量的には多いが、すべて後世の層に混入して出土している。瓦類は大型の、いわゆる「大仏瓦」である。平瓦・丸瓦があるが、完形のものなく、瓦当も一切なかった。特に1区の時期不明の整地層から多く出土している。

江戸時代末期から明治時代初頭の遺物は、各調査区の当該期の整地層から出土した。土師器、染付、磁器、施釉陶器、土師質土器、瓦類などがある(図13)。2区、3-2区、4区、7区で確認した恭明宮の時期と考えられる整地層から出土している。



図13 3-2区出土遺物

明治時代中頃の遺物は博物館建設時に用いられたもので、煉瓦、モルタル片、タイル、スレートなどが、博物館建設時の整地層や基礎構築に伴う掘削、後世の埋設管埋土などから出土した。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、青磁				
桃山時代 ～江戸時代前期	土師器、焼締陶器、施釉陶器、瓦類、壁土				
江戸時代末期 ～明治時代初頭	土師器、染付、磁器、施釉陶器、土師質土器、瓦類		染付7点、施釉陶器8点、土師器2点、土師質土器3点		
明治時代中頃	煉瓦、モルタル、タイル、スレート				
合計		6箱	20点(1箱)	1箱	4箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

5. ま と め

本調査では、国指定の重要文化財である旧帝国京都博物館本館の基礎の状況および旧本館構築時の整地や掘込みなどによる掘削状況を把握するとともに、方広寺跡や六波羅政庁跡などの遺跡の残存状況を確認することを主眼とし、7箇所の小さな調査区を各所に設けて調査を行った。

(1) 旧本館整地層と以前の遺構・整地層との関係

旧本館の立地する場所は、東から西へ傾斜する丘陵斜面であり、建設に先立って標高の高い東側を大きく削り、低い西側へその土を盛り平坦面を作り出す、整地事業から開始された。平坦面上面の標高は41.70 m前後と考えられる。東側の5区・6区では地山が削り出され、それ以西の調査区では0.5～1 mの厚さの盛土（旧本館整地層）が検出された。つまり、5区・6区では、旧本館整地以前の遺構・整地層および旧地表は完全に削り取られてしまっており、残存していない。

旧本館整地層の下面で、江戸時代末期から明治時代初期（恭明宮期か？）の整地層を確認できたのは7区以東で、2区、3-2区、4区である。上面の標高は7区では41.50 m、2区で41.25 m、3-2区・4区で40.90 mであり、7区以西の地域では旧本館基礎構築に伴う掘削がなければ、江戸時代末期から明治時代初期（恭明宮期）の整地層は良好に残存していたと考えられる。旧本館の整地事業によって削られずに残る境界が、5区・6区と7区の間いずれかの地点にあると推定されるが、今回は確認できなかった。また、1区で確認した時期不明とした整地層は、大きな谷状地形を埋め立てたもの、あるいは大型遺構の埋土の可能性もある。方広寺期以降、旧本館整地層以前とみられることから、江戸時代末期から明治時代初期の整地（遺構）と考えておく。

今回の調査場所では、明らかに方広寺期以前に遡るとみられる層・遺構は検出できなかった。

(2) 旧本館基礎の構築状況

旧本館の基礎の構築は、各調査区で確認した層位関係を整理すると、以下のような手順で行われたと推測される。まず、大掛かりな整地によって平坦面を確保した上で、建物基礎の割付をした後に基礎部分の掘削が行われた。基礎構築のための掘削は、建物壁面より0.5～0.6 mの範囲とみられる。基礎部分の掘削前に2区では約2 m、3-1区では1.5 m以上の余掘りがなされ、地山を確認した後、一旦埋め戻して、他の地点同様に基礎部分の掘削を仕直しているようである。

基礎部分はいずれの箇所も地山を掘り込んで地山上に直接構築されており、コンクリート基礎により天場を揃え（標高40.95～41.05 m）、その上にレンガによる基礎を積み上げている。コンクリート基礎は、場所によって厚みや形状が異なる。板材により型枠を組んで、骨材となる小石を入れて上面からコンクリートを流すが、全面にコンクリートが廻り切らず、下方では小石が露出している。レンガ基礎は「オランダ積み」を採用しており、下から2段+2段+2段と控え積みし、5段+2段を直立に積み上げ、その上面に石の基礎を受ける。

コンクリート基礎の下面の構造については今回の調査では確認できなかった。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほうじゅうじどのあと・ろくはらせいちょうあと・ほうこうじあと							
書名	法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-10							
編著者名	高橋 潔							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほうじゅうじどのあと 法住寺殿跡 ろくはらせいちょうあと 六波羅政庁跡 ほうこうじあと 方広寺跡	きょうとしひがしやまく 京都市東山区 ちややまち 茶屋町527	26100	546 540 541	34度 59分 25秒	135度 46分 23秒	2010年8月 16日～2010 年9月10日	約50m ²	建物基礎 状況確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
法住寺殿跡 六波羅政庁跡	寺院跡 離宮跡 都城跡 邸宅跡	鎌倉時代 ～室町時代		土師器、青磁				
方広寺跡	寺院跡	桃山時代		土師器、陶器、瓦類				
		江戸時代末期 ～明治時代初頭	整地層	土師器、染付、磁器、 陶器、瓦類				
		明治時代中期	旧本館建設関連 遺構	煉瓦など				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-10
法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡

発行日 2010年12月28日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961